

かつた理由については殆ど聞く處がないのである。今や渡歐の途にある著者が歸來せん時この研究が更に深刻味を加へ全體として封建社會崩壞過程に説明が與へられる事を期待するものである。(菊版七二九頁、京都弘文堂發行、價四、五〇圓)(以上肥後)

●景印入唐求法巡禮行記

本書は東洋文庫論叢第七(未刊)の附篇として京都東寺の觀智院本を景印し三百部を限りて刊行學界に提供したるものなり。本書の來歴に就きては今更事新しく縷述するまでもなく、今を距る一千九十二年の昔、仁明天皇時代に我が遣唐大使藤原常嗣に従ひて遙々入唐せし慈覺大師の筆に出で、大師が五臺山に登り、長安の高栢を叩き凡そ拾年間に今の江蘇山東直隸山西河南陝西安徽の各省地方を巡歴したる紀行なり。その記する所風俗儀式官制政治外交佛教道教摩尼教の諸方面に亙り、海陸通路の地名と情景とは直ににりて以て當時の交通地理の參證に十分に足る。然れば本書が根本史料としての價値の豊富なるは喋々を要せざるのみならず、一千年前に於ける此の

種の紀行としては和漢洋を通じても比類稀なる世界的史料と謂ふも決して溢美にはあらず。大師眞蹟の原本は早く亡逸せしが、その寫本は夙に宋朝祕閣の藏本にも入り、我が國に在りては東寺觀智院と池田長田家に各々一本あり、觀智院本は伏見天皇の正應四年(元の世祖の至元二十八年)に兼胤法印の鈔寫せしものに係り今國寶に指定せらる。嘗て續々群書類從、及び四明餘霞の附録として活字にて印行せられたるこあるも珂羅版を以て觀智院本の原型そのまゝに、刊行せらるゝは今回を以て權輿とす。本書の内容が學術的に利用せらるゝは從來あまり普ねからずその日本唐新羅に關する豊富なる記載にして史の闕を補ひ傳の訛謬を正すに足るべきものに實に枚舉に遑あらずるは將來永く本書が史料として學界に珍重せらるゝ所以ならむ。國史研究者は勿論、東洋史朝鮮史研究者ににり至重至貴のものゝ、今回刊行のものは全部珂羅版の景印にして四大冊になし、別に文學博士岡田正之氏の解説一冊を附す。解説中には史實補正の二三例として唐の武宗の宦官抑壓の經緯、武宗の廢佛毀寺の事情、新羅

の重臣張寶高の事略に關し論證する所あり。出版界近來の快事とするに足る。さるにつけても本書の景印の如き非營利的美舉に對し、東洋文庫が學界の爲に率先して敢行せられたるは學徒にこりては大なる感謝の念に堪へざる所なり。(和裝帙入、五冊、東洋文庫發刊。價金貳〇圓)

●東洋史說苑

文學博士 桑原隲藏著

本書は著者が嘗て新聞雜誌に發表し又は講演したる舊稿を編輯し、之に新に起稿したる論文及び考覈増補したる新篇を加へて合計二十四篇を時事、文化、宗教、風習、氣質、人物、雜纂の七項に分類し書肆の請にまかせて刊行したものである。著者は自らその比較的通俗なるものを選びたりと謂はるゝも、實はその記述法の通俗的なるに止まり、その内容は充分なる學術的論文である、就中新篇、高岳親王の御渡天に就いて「の一篇は親王の薨去地の羅越老樞説の舊説の誤謬を訂正し、舊説の論據の誤れる點を學術的に論破せる名篇にして、正に先人未發の創見を發表せるもの、羅越國の位置の研究は茲に永久的

なる鐵案を提出せられたるものと謂ふべきである。「大秦景教流行中國碑に就いて」「支那の國教問題」も此の形式に於ては今始めて公にせられた雄篇と謂ふべきもので、その他の諸篇即ち支那の革命、黃禍論、對支政策管見、對支文化事業に就いての希望、晋室の南渡と南方の開發、東洋人の發明、歷史上より觀たる南方の開發、老子化胡經、ネストル教の僧及烈に關する逸事、大師の入唐、支那人辮髮の歴史、支那人の食人肉風習、支那の宦官、支那人の文弱と保守、支那人の妥協性と猜疑心、秦始皇帝、支那史上の偉人孔子と孔明、東洋史上より見たる明治時代、支那學研究者の任務、支那の人口問題は、一般讀者には好個の智識となり、東洋史研究者には研究方法の好個の指針となる、歴史家は勿論苟くも支那を論ぜむとする者は必ず讀破せざるべからざる好著である。加ふるに高岳親王御渡天行路圖、唐代日支通航圖、大師入唐行程圖、唐代長安城坊圖は専門家にも參考となるべく、黃禍論、唐代の老子化胡經、石佛寺の現狀、大秦景教碑及その刻字、辮髮の六葉の寫眞は本文の理會を助けて居る。菊版本文五百四十三頁 價三・八〇圓 京都市寺

町丸太町弘文堂發行。「以上那波」

● 出雲上代玉作遺物の研究

京都帝國大學文學部考古學研究報告の第十冊として標記の如き研究報告書が出版された。四六倍版、本文一〇二頁に附録として日本發見磨製石鏃及石劍聚成表一〇頁を收め、挿圖四十圖、附録圖版三圖の外に圖版三十九圖、附するに英譯二〇頁を以てした雄篇である。本文は濱田博士、島田・梅原兩助手の共同執筆に係り、附録は梅原・島田兩氏の作製したものである。

我國上世の文明を物語る片影は、幾多の方面に跡を留むるが、上代人が好んで佩用した玉類の如き、またその隨一たる事勿論である。本書は即ち出雲地方に中心を有する玉作の遺跡を研究し、遺物を調査し、更に玉の製作順序の過程を推考し、本邦に於ける玉の問題に觸れんしたものである。故に先づ玉作の遺跡地たる八束郡玉造村・忌部村・大庭村の遺跡を概説し、玉磨砥石、玉類半成品に對して極めて微細なる調査を遂げてその結果を或は圖版に、或は圖表として示し、轉じて玉の製作法に及ば

んとし、出雲及支那に於ける現代の攻玉法を調査し到底文獻上知り得べからざる各種の資料を獲、それを以て古代攻玉法の推考に供し、磨砂としては恐らく石英水晶等の細砂を使用して間に合せて居つたものであらうとか、穿孔法としては古い時代には舞鏝を兩面から使用して目的を達した事もあつたらうし、またやゝ後には鐵鏝を手を以て廻轉するの安全を知つて、之を用ゐたであらうとか、穿孔を兩側からするのは硬玉・軟玉・琥珀等であつて水晶・璧玉・瑪瑙は片側からであつたとか、コ字形の勾玉は豫め穿孔したもので比較的後代（奈良朝又はそれに近い年代）の作で墮落的の形式のものであるが、古い時代のもものは全體の形式を先にし穿孔を後にしたのであるとか幾多の珍らしい教示を與へて呉れるものがある。考古學的の解釋に土俗學的智識を應用したものとして、成功したものである。

最後に於て「日本に於ける硬玉軟玉問題」に論及して居るのは、何人も最も聞かんとする所であり、且つ傾聽すべき點であるに信する。曰く、我國に於て石器時代の遺